

江戸時代の芦峯寺・媼尊信仰の一考察

—安産・子育て信仰を言わない理由—

細木ひとみ

はじめに

芦峯寺集落にあった媼堂で媼尊像を祀っていた。この媼尊像については、現存する一躰の像底部に「永和元年六月日 式部阿闍梨□□」と記された墨書銘があり、これによって少なくとも永和元年（1375）には、媼尊が芦峯寺で祀られていたということが窺える⁽¹⁾。また、天文16年（1547）に寺嶋職恵が寄進した「黄銅製仏餉鉢」⁽²⁾が3個残されており、この時には芦峯寺の媼堂の本尊として3躰は祀られていたことが考えられている。さらに、江戸時代においては、媼尊や媼堂が芦峯寺の中心の一つで、この地を治めていた加賀藩により庇護されていたことがわかっている⁽³⁾。しかし、明治期の神仏判然令をはじめとする一連の神仏分離の動きで、政府は芦峯寺の媼尊を「醜体、言語道断の邪神」とし、他の仏教的堂舎とともに媼堂を破却させている。明治18年（1885）に立山を訪れた竹中邦香も、「越中遊覧志」巻8⁽⁸⁾に、

蘆峯もまた寺院の総称にして、もと此地に媼尊と称する仏像のありければ、それを奉ずるための僧舎三十六坊、又大宮・若宮といふ神祠を奉ずる社人五名ありて、旧藩侯より百俵の地を寄せられ、その収入ハ衆徒社人之を分配し、衆徒の宗旨其他、藩主の待遇に至るまでも、都て岩峯寺に等しく、格式も相持して下らざるものなりしが、維新の後岩峯寺とともにも還俗して神官となり、媼尊の像ハ遠く魚津^{本州下新川郡にあり}の実相院に移し、堂宇もまた廢して今ハ唯殘礎を遺すのみ。

と記しているのである。

このような芦峯寺の媼尊の性格は複雑で、例えば廣瀬誠氏は「立山御姥信仰の一考察」⁽⁴⁾で「姥尊の母神的性格と冥府神的性格とを巧みに利用して、立山開祖の亡き母に仕立てあげた、衆徒の努力の一つであろう。姥尊の神格はまことに複雑で、山姥・山の神的な性格、橋の袂を守る関の神的・道祖神的な性格も併せ持っている。」とし、「立山の御姥が最も強く打出したのは、母神にして冥府神といふ性格であった」と述べている⁽⁵⁾。また、石原与作氏も「媼神は獵人の祀る山神と、村境を守る塞の神に端を発し、その後、農民の祈願する地母神、穀母神化し、三転して広く天下の女性の産褥死を免れ、安産祈願としての生殖神として尊崇を受けたものである」と述べている⁽⁶⁾。その他にも、多くの先学者によって研究されており、芦峯寺の媼尊信仰は複雑なものとして捉えられているのである⁽⁷⁾。

それにしても、全国的にみても「姥尊」への信仰は複雑である。しかし、その一つとして、女性（老婆）で乳房が垂れている姿や「姥」を「乳母」と考えられたことなどから安産や子育てを祈るところは多い。

例えば、福島県耶麻郡（現：福島県喜多方市）山都町藤沢の姥権現は「四月二十四日が祭礼で、かつては喜多方市からも参拝に訪れ、前日から藤沢地区の夫人たちが、食べ物を持寄ってこの堂に集まり、出店もあって念仏踊りもしたと言われています。境の神、塞ぎの神を祀られたものが、後に安産の神として信仰されるようになったようです」といい、福島県耶麻郡猪苗代町関都の関脇優婆夷堂のおんば様は「会津地方でも最もよく知られた安産信仰の拠点」という⁽⁹⁾。また、その姿から「奪衣婆」とも混同されることも多いが、東京都新宿区にある正受院の奪衣婆像も子供の疳の虫や子供の病を治す「子育て老婆尊」として信仰されたというのである⁽¹⁰⁾。

そして、芦峯寺媼堂から勧請されたと伝える福井県福井市の能念山仏心院乗久寺（時宗）に祀られている「躰倉媼婆尊像」もその一つである。この尊像に対しては、昭和17年から昭和21年までの「媼婆尊御参詣簿」と、昭和31年から平成15年までの「媼婆尊御参詣名簿」が残っており、女性たちの信仰が窺うことができる。

これに対して、芦峯寺の伝承で「1月14日の前夜、媼尊に『おもきもき』1本を供えて、15日早朝からの『嫁たたき』行事に子供達が“おもきもき”を持って新婚の家を回ったと伝えられている。」⁽¹¹⁾とあるが、江戸時代の史料をはじめ、芦峯寺集落で行われた昭和30年代の聞き取り調査、現在の聞き取り調査においても、芦峯寺の媼尊や媼堂に対する女性たちの安産や子育てを祈る信仰を見ることができない。

そこで、本稿では、立山へ訪れた人びとが記した芦峯寺の媼尊や媼堂を中心に、江戸時代に芦峯寺の媼尊がどのように捉えられていたのかについて見ていきたいと思う。そして、芦峯寺の媼尊への信仰を考える一つとして、なぜ媼尊に対して安産や子育てに関する信仰を言わないのか、その理由を考えていきたい。

1. 芦峯寺媼尊と関わる「姥尊」への信仰

まずは、芦峯寺媼堂から勧請されたと伝わる各地の「姥尊」に対する安産や子育ての信仰を紹介したい。

はじめにでも紹介した、福井県福井市の能念山仏心院乗久寺（時宗）に祀られている「躰倉媼婆尊像」（写真1、2）の由来を記した「躰倉之媼婆縁起並序」⁽¹²⁾（下線は筆者による加筆・写真3）には、

躰倉之媼婆縁起並序

夫、月氏の教法を以て支那の間に伝はりしより、已来經典東域の境に広まり、一心三觀の窓の前には実相真如の月光をみがき、三密五相の檀の上には心城八葉の花、匂ひを翫ひし事、みな是諸仏大士悲切平等にして差別なしといへども、薰癸の因縁ある故に応物現形の異なること杏に竜華の晨に等しく、蜜巖華藏の宝刹を望に似たり。これ併仏菩薩の利生方便の結縁、その貴事、末法といへども更に尽ることなきはおや。ここに越の前州足羽郡福井の庄、能念山乗久寺に安置する処の躰倉の媼婆の濫觴を尋ぬるに、当山第一世蘭阿仏法上人瑞夢に依て、院の隣岳、底喰川の流より取挙たまふ靈像なり。其辞端を訪に、明曆二年丙申秋九月十五日の夜、底喰河の辺を放たまふに、水添碧潭として、浪生死の垢を洗ふ。かくて川辺を歩行たまうに楊柳の緑に生茂たる中より怪光の見へたれば、蘭阿上人不思議におもひたまひ、錫杖にて枝葉をかき分け水中を探りたまふに、ひとつの木像流出たり。取りあげ見たまふに聖像にもあらず。優婆夷の形にして肩に嬰兒を負へる姿なれば靈形の靈軀なりとて、寺に持来りたまふとおもひし。ふとに夢は覚侍りぬ。され共、明れば紛事ありて忘れたまふに、先瑞三度に及ぬれば、蘭阿上人怪思ひたまひて、同月十八日の晨朝の法会終て後、密かに底喰川の辺を遊行したまふに、其様、夢の趣にひとしかれば、流のみなかみを望ながら歩たまふに、楊柳の生立て枝葉河水を覆へり。これひたすら瑞夢に彷彿せりとて、錫杖にて探たまふに、あやしき木像浮出たり。引挙みたまふに瑞夢の影像に少も違ざれば、有難感応を得たりとて、信心内にもよおし、歡喜面に顛れ、しかとに抱来て精舎に案置し、香花を備、毎朝闕伽にて米を清め供養し、誦經怠ざりに、

（中略）

抑躰倉の媼婆と申奉るは本地は觀世音菩薩にて、垂迹は帝釈天也。南閻浮提粟散迦土の女人産子の後、



写真1 躰倉媼婆尊像（乗久寺蔵）



写真2 左肩から嬰兒が顔を覗かせている

媼の出ざることをなげき苦が故に、この苦を救はんため、優婆夷の身を現、金毛の牛に乗たまひ、麻・桑・菁草の種を持って越の中州跽倉に降臨したまふ。故に跽倉の媼婆と名づけ奉る也。麻・桑・菁草の種を持来りたまふ。所謂は、北限の地、山深雨気強により地味黄して五穀熟せず、往古の民俗これをなげく故に帝釈あはれみたまひ、麻・桑・菁草の種を授たまふ。自永以来北越の土民桑・菁草を植て業とせる事、この婆子の施たまふより始けるとなん。亦是日本六十余州に分身し、貧窮短命の者には福寿を授、多病の者には方便をもって妙薬をあたへ病苦を除かしめ、或は女人難産にて苦時は婆子の覆たまふ綿巾をして産婦の腰にまとはしめむに、忽に平産なさしむべしと。或は女人有て男子を求めんと願ふに、聡敏知恵の男子をあたへ、或は女子を求めんと願ふに端嚴美麗衆人愛敬の女子を与べし。復、人有て一切の所願を成就せむとおもはば、正・五・九月十八日沐浴精進し麻・紵・繪・續を供養し赤飯茶菓續續をもって供物とし、一心に余念を雑す、普門品三十三巻を讀誦せんに所願を立所に満足する事をへむと也。今垂迹の利益によって本地の大悲を案るに、救世観自在尊は閻提の薩埵にして、大悲無尽の故に本身は西方の弥陀如来につかへたまふと云へども、道に衆生の受苦を忘れたまはざる故に、身光の中に五道を現、無量百千万億の衆生の苦悩を受けむに、一心称名の音色を觀し来て解脱を得せしめ、或は帝釈身を現、或は優婆夷身を現して、為に説法すとあれば、この婆子の本地観自在尊なる事明かなり。(後略)

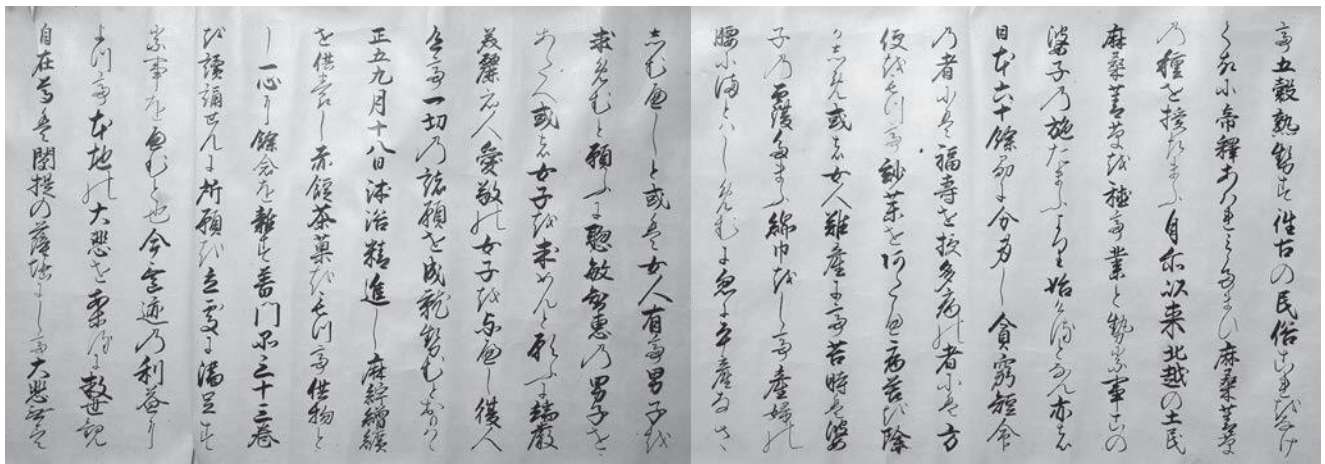


写真3 跽倉之媼婆縁起並序 (部分・乗久寺蔵)

つまり、乗久寺の縁起では、跽倉媼婆尊像の本地(神の本来の姿の仏)は観世音菩薩、垂迹(神の姿)は帝釈天とあり、南閻浮提(須弥山の南方)の粟散辺土(粟粒を散らしたような小国)の女人が出産後、お乳がでないことを嘆き苦しんでいるので、この苦しみを救おうと、優婆夷の身をし、金毛の牛に乗り、麻・桑・菁草の種を持って越中の跽倉に降臨し、そのために跽倉媼婆尊と名づけたというのである。そして、日本六十余州に分身して、貧窮短命の者には福寿を授け、多病の者には方便をもって妙薬を与えて病苦を除き、また、女人難産にて苦しい時は婆子(跽倉媼婆尊)の覆っている綿巾を産婦の腰にまとうと、たちまち平産するということである。さらに、男子が欲しいと願うと聡敏知恵の男子を与え、女子が欲しいと願うと端嚴美麗でみんなに愛される女子を与えるとも言っているのである。

さらに、媼婆縁起の拝読文⁽¹³⁾には、乳が出ず苦しむ女性が媼婆尊像の供米をうけて食べるとたちまち乳が出るようになるという、また難産にて苦しむ時には媼婆尊像の頂きに被っている綿巾を借りて腰にまとはば安産になるとあり、これにより近村遠里の婦人たちが供米を授けろと参詣したというのである⁽¹⁴⁾。

以上のようにみえてくると、乗久寺においては、縁起に記されている「麻・桑・菁草の種を持って越中の跽倉に降臨」したことや、「日本六十余州に分身して」という話は、芦峯寺の媼尊の由来の影響を受けていると考えられるが、「女人難産にて苦時は婆子の覆たまふ綿巾をして産婦の腰にまとはしめむに、忽に平産な

さしむべし」や「女人有て男子を求めんと願ふに、聡敏知恵の男子をあたへ、或は女子を求めんと願ふに端巖美麗衆人愛敬の女子を与べし」といった文言は、芦峯寺嬬尊の縁起や由緒書にはなく、乗久寺独自の信仰とも言える。

さらに、立山への信州側からの登り口と考えられている長野県大町市の大姥堂の大姥尊については、西正院大姥堂にかかげられている、昭和5年の「大姥御本尊御縁起」⁽¹⁵⁾より、天正12年(1584)12月22日に富山城主の佐々成政が主従数名を随えて信飛山脈を越え、遠州濱松(現：静岡県浜松市)の徳川家康のもとにいたるために、まず立山の大姥堂に参詣し、御本尊の大姥尊にこれからの難路を無事であるよう祈願し、大姥尊を従者が担いで黒部溪谷を渡り、「左良左良越」(さらさら越え)を越えて北葛澤から大出へと出て来たという。そして、佐々成政公の「内密にせよ」の約束を守り、秘かに祀っていたが元和3年(1617)に堂宇を建立して、うやうやしく安置したのだといっている⁽¹⁶⁾。この伝承から、大姥尊に対して「山の神」としての役割が見られるが、それでも地元の人々には、五穀豊穡や山仕事の安全祈願のほか、子供の痢の虫封じとして虫切り鎌が授与され、ご利益があった場合には倍返しするという風習も見られる⁽¹⁷⁾(写真4)。これについては、廣瀬誠氏が『立山黒部奥山の歴史と伝承』⁽¹⁸⁾などで、「芦峯の姥堂が女人堂 女人救済を説いているのに対し、大出の姥尊が子どもの守護神という性格が強いと述べていることから窺うことができるであろう。

福井県福井市の乗久寺においても、長野県大町市の大姥堂においても、芦峯寺嬬尊で語られる由来や功德が見られるものの、芦峯寺嬬尊では語っていない安産や子育てに関する功德が地元の人々によって信仰されているのである⁽¹⁹⁾。



写真4 大姥堂のむし切り鎌

2. 立山を訪れる人々が見た芦峯寺嬬尊と嬬堂

それでは次に、立山を訪れる人々が記した参詣記や紀行文などを見ていき、どのように芦峯寺の嬬尊や嬬堂が考えられていたのかを考えていきたいと思う。

寄進状以外で、詳しく芦峯寺の嬬尊や嬬堂が紹介されたものとして、まず寺島良安によって編纂され、正徳2年(1712)に成立した『和漢三才図会』⁽²⁰⁾がある。

芦峯寺 一里、有坊、有姥堂 大寶三年卯四月十二日慈興上人老母卒于江州志賀、慈興自作母像、慶雲元年八月彼岸中日為葬禮法式、于今然。

とあり、「芦峯寺に有る堂」として嬬堂を紹介しており、祀られる像が大寶3年(703)4月12日に江州志賀(現：滋賀県大津市とその周辺)で亡くなった「慈興上人自作の母」の像だというのである。そして、慈興上人の母親の葬禮法会として、慶雲元年(704)の彼岸の中日に行った法会を今にも続けていると言っているのである。

次に、富山藩に歌道方として仕えた佐藤月窓が寛政10年(1798)に記した「立山紀行」⁽²¹⁾にも、
 蘆峯寺ハ岩峯寺より二里ありあるきにてこゝにも二十四坊軒をならへたりその中に兼て契置つる坊につく夕日猶残りぬれとも姥堂に参る。是や大寶三年四月二日慈興上人の母江州志賀にて終を遂給ふ。上人悲にたへずしてみつから像をきさみて慶雲元年八月葬禮の式をなし給ふより、いまに秋の彼岸にはその折にたかハぬ執行ひ、まめやかなり。近頃焼亡のこと有し、急大守より木の道のたくミに仰てもとよりも猶うるハしく造りなし給ふ。

とあって(下線は筆者による加筆)、先と同じように慈興上人の母親が亡くなり、これを悲しんだ上人が自

ら刻んだ像で、慶雲元年八月の葬礼の式を行ったと記している。このように、立山開山者の慈興上人が亡くなった母親を供養する話は、「立山曼荼羅」にも描かれている目連尊者と地獄で苦しむ母親との話が影響しているとみられる⁽²²⁾。

これに対して、津村淙庵は寛政7年(1795)に『譚海』⁽²³⁾の中で、媼堂の媼尊と見られる像について、「こゝにある姥の像はなはだ異なり、毛髪動く如く、眼精いけるが如し、おそろしき事いふばかりなし。こゝはすでに山の中段にいたる所なり。」と記しているのである⁽²⁴⁾。

さらに、十返舎一九がかつて訪れた立山の基本的な旅情報と自らの体験談を交えて、文政11年(1828)に記した『諸国道中金草鞋』⁽²⁵⁾には、媼堂について「芦峯に坊舎あり。姥堂あり。これは慈興上人の母の像なり。毎年、八月彼岸の中日に葬礼の法式あり。」と記している。

ここまでは、媼堂については芦峯寺にあること、祀られている媼尊像については「慈興上人が自ら刻んだ母親」の像と語られていたということと、慈興上人が母親のために行った慶雲元年8月の葬礼を今に伝えて秋の彼岸に行っていることが記されているだけである。

参詣した理由や目的については触れているのは、文政6年(1823)に尾張藩士某が記した『三つの山巡』⁽²⁶⁾である。これには、

立山へ参詣のもの先ツ之姥堂へ詣、此所にて色々教化いたし候事也。一代に一度ならでハ参る人もなきよしにて六十一才迄ハ登山出来るとて、佛も御待受有といろいろ申演。此御前へ出たるものハ故障なく参詣出来る。心立悪きものハ御前へ出られずなど云。

とあり、立山へ参詣するものは先ず芦峯寺にある「姥堂」へ詣り、いろいろと教化を受けたという。そして、仏(媼尊か)の前に出ることができる者は無事に立山へ参詣でき、心立ちが悪しき者は仏の前にも出られないというのである。また、越中州放生津(現在:射水市)生まれの佛山禅苗僧が天保2年(1831)6月20日から29日にかけて立山を参詣した際の様子を記した「立山参詣記」⁽²⁷⁾にも、「早朝七ツ時二出足、芦峯寺帝釈堂并宇婆堂へ参詣し…(中略)」とあり、やはり立山へ向かう前に、芦峯寺では帝釈堂とともに「宇婆堂」へと参詣していることがわかる。

詳細に媼尊や媼堂のことが記されているのは、天保11年(1840)9月に頸城郡福嶋村(現:新潟県上越市)の関根新左衛門が記した『越中立山参詣記』⁽²⁸⁾である。

旧九月六日暮六ツ半時芦峯着。教蔵坊差図二而善導坊二泊、翌七日朝八ツ半時御姥へ参詣仕候所、勤経最中二而山中無難之祈念をいたし御山二差掛ル。

と記されており、朝八ツ半時(現在の朝4時ごろ)に媼尊へ参詣し、山中での無難を祈念して立山へと向かっている。さらに、

○登山之節、別当江相頼、其日ニ(カ)姥様へ参詣いたし天氣窺すべき事也。

天気よろしき時ハ御貌 白し

雨 なれハ // 班ニ成、又ハ青黒し

風 なれハ // 御目蠟燭之火ノ如光ル

とも記されて、禅定登拝の際の天気を媼尊のお顔をみて占ったりもしている⁽²⁹⁾。この史料で、立山へ向かう際に媼尊に参詣することやそれが立山山中での安全を祈念するためであることがわかり、ここで芦峯寺の媼尊の「山の神」としての役割が窺えるようになる。

これから4年後、金子盤蝸が天保15年(1844)6月22日に金沢を出発して立山登拝を行っており、そのときの様子を記したのが『立山遊記』⁽³⁰⁾である。6月24日の朝、富山の旅籠町菊屋清次郎方を出発して、夕方に芦峯寺に到着、玉泉坊で宿泊している。そのときに芦峯寺内を散策したようで、媼堂についても詳細に記しているのである(下線は筆者による加筆)。

○村ヨリ南へ二丁斗り往ハ老姥堂有リ。山門有リ、二王ヲ安ス。信州ヨリ献スル銅ノ大地蔵尊有リ。別當有リ。少シ坂ヲ下ル兩傍皆杉ノ大樹有リ。昼モ闇シ。半丁斗り行テ、長サ四十間斗ノ橋在リ。橋下甚

だ深シ。兩岸皆石ヲ疊ミ上ケ、美麗ナル橋ナリ。銅ノギホウ在リ彫ス。曰、寛永元年七月吉日松平筑前守ト在リ。

九里氏曰、此橋ハ寛永中 筑前守様御勾某シナル人心願在リテ 御上へ願ヒテ作りタル故ニ 筑前守ト云下ニ勾ノ字有ルヲ僧ノ姦計ニテ勾ノ字ヲ削リテ直ニ 筑前守様ヨリ被 仰付タリト云コト詐人ヲアザムク也

橋ヲ渡レハ直ニ左右ニ大杉在リ。右ハ十四囲、左ハ十六囲ト云。実ニ海内マレナル大樹ナリ。立山中、杉ノ大木有リト雖モ此ニ樹ニ及フ者ナシ。左ノ方大杉ニ傍テ少シ下リ橋有リ。橋下ニ小瀧ニ流有リ。京師清水ノ瀧ノ如シ。参詣ノ者、此ニテ垢離スル也。其後、老嫗堂へ拜ス。堂内幕ヲ張、昼モ闇夜ノ如ク、燭ヲ点点シ、開帳ス。僧縁記ヲ講ス。甚長ク、不堪聞。老姥神ノ木像正面ニ三体有リ、正座ス。丈二尺四五寸斗、面状八十ノ老婆ニテ、其醜惡ナルコト不堪見。此レ本尊ナリ。左右ニ醜惡ノ老婆ノ木像二十餘モ有ルヘシ。皆白衣ナリ。四五年前、金沢観音院ニテ開帳有リ。此堂 御上ヨリ御普請所ニテ奇麗ナリ。堂ノ形ハ鶴来白山社ノ如シ。開帳十二銅御膳百疋ナリ。境内山間ニテ狭シ。宿坊へ帰レハ日昏ル○宿リキチンニテ米ヲ求ム。一升七十三文也。菜汁ニセンマイ、干大根ノ煮物也。宿賃一人ニ七十文斗也○蚊ハ形小ニテ、嘴甚だ利シ。夜臥別ニ席ヲ藉カズ、昼へ直ニ臥ス。蚤甚だ多シ。

老姥神ハ春秋彼岸ニ祭礼有リ。此時橋上ニ白布ヲシキ、神事有。其布ハ信州ニ講中有リテ毎年新ニ出来スト云。神ノ白衣モ村中七十有餘歳ノ老婆別火ニテ織ルコト、甚イワレ有コト也。僧縁起ニ演フ。

岩岨ヨリ足岨又芦岨ニ作ル迄四里有リ。當所ノ諺ニテ、凡立山禪定ノコトハ皆岩岨ニテ預リ世話スルコトニテ、芦岨ハ立山ノ大麓ナレ共、却テ山中ノ事ニ預ルコトナシ。芦岨ハ登山ノ者ヲ宿スル斗ノコトニテ、一切山中ノコトニ預カラズ。登山ノ者岩岨ニ宿シテハ登山ニ不弁利故足岨ニ至リ宿ス。依テ、両村毎度争フコト有リテ、両村常ニ不和ナリト云。

今夜五人明日登山ノ料米又一人ニ草鞋三足ヲ求メテ中語ニ負ワシム。

これによると、橋の下の小瀧で垢離し、「老姥堂」へ参詣するとあり、堂内は昼でも夜のように蠟燭を点灯して開帳している。その際に、僧が縁起を講ずるが、それが長く聞くに堪えないとも言っているのである。さらに、祀られている尊像については正面に正座した3体があり、丈が2尺4寸か5寸くらいで、80歳の老婆の顔をして白衣を着ているということがわかる。しかも、春と秋の彼岸に祭礼があり、橋の上に白い布を敷いて神事を行うとあり、この白布は信州の講中から毎年新たに作られると詳細に記している。ここで言う「正座」がどのような座り方をさせているのかはわからないが、丈（像高）が72~76cmくらいだというのは、現存している嫗尊より大きいものと考えられる⁽³¹⁾。また、これまで「八月彼岸の中日に葬礼の法式」が行われるとあったものが、春と秋の彼岸の2回へと変わっている。

ここで記されているように、芦岨寺の嫗尊の縁起を嫗堂へと参詣した人々にも読み聞かせていることは、上田作之丞の記した『老の路種』巻2の「嫗堂縁記」⁽³²⁾からもわかる。

芦岨に宿してうば堂へ詣で賽銭しければ、蠻僧かの嫗の縁起を読み聞かせさんと云ふ。二三遍も辞しければ共、強ひて読み聞かせんとて、巻物取出したからかに読む。句切あしくして、誠に意義分らず。あまり會得しがたきは、しばし待ち給へと考へ得て、又讀むべしと云へば、よほど前よりくり返し、たからかに讀むなり。偕往々わすれて讀み得ざるは處、子どもの謠をくるが如く、何返もくりかへし云ふうちに、思ひ出す体にて讀つぐなり。をかしさ云ふもさらなり。(後略)

とあり、「うば堂」へ詣り賽銭すれば僧より「嫗尊」の縁起が読み聞かされたというのである。

上記で紹介した参詣記や紀行文、随筆集など以外にも、嫗尊や嫗堂について記しているものもある。ほとんどが立山登拝を目指した男性が記したものであり、1700年代から1800年初期ごろまでは嫗堂については芦岨寺にあるということのみ記されているだけで、参詣した理由や目的については触れていないものが多いように思える。そして、祀られている嫗尊像については「慈興上人が自ら刻んだ母親の像」と語られていた

ことや慈興上人が母親のために行った慶雲元年8月の葬礼を今に伝えて秋の彼岸に行っていることのみ、広まっていたようである。しかし、天保期（1830年～）ごろになると、立山へ向かう際に嬬尊に参詣することが記されており、その目的が芦峯寺嬬尊を「山の神」として捉えて、立山山中での安全を祈念するためであったことがわかる。そして、その際には、僧（嬬堂別当）によって嬬尊の由来を記した縁起が講じられていたのである。

これに対して、女人禁制の立山を訪れた女性と嬬尊との関わりが窺えるのは、文久3年（1863）7月6日に善光寺と立山へ参詣した、美濃国沢田村の三宅嘉右衛門と女房の八重の参詣記⁽³³⁾である。これには、善光寺に参詣後、二十一日に滑川宿を出立し立山へ向かっており、

一廿一日、足蔵寺きよ蔵坊へとまり、翌廿二日雨天にて逗留、翌廿三日朝七ツ立にて立山え登り、是より奥院迄十一り半来テこもり堂まで十り半、七ツ半時参着、直ニ寺御僧案内にて地こく谷をめくり、日をくらかいてこもり堂へ引取、わらじものかずニ其まゝ暫休ミ、直ニ廿四日早七ツをきにて、奥の院へ参詣、直ニ引取支度してこもり堂出立、途中にて支度、暮六ツ頃きよ蔵坊へ帰着

三百五十文 山にてまきせん

壹百六十文 宿料

貳百五十文 案内ちん

立山ハ女人きんせいニ付、家内八重ハ登山内きよ蔵坊ニ逗留立山麓こうば尊と申仏あり、是迄参詣とある（下線は筆者による加筆）。夫の三宅嘉右衛門が立山登拝を行っている間、妻の八重は立山が女人禁制の山であるため登れず、芦峯寺の宿坊に逗留しており、嬬堂の嬬尊を参拝してそこから立山を拝したというのであるから、女性にとって芦峯寺の嬬堂より先（立山）へは進めなかったということがよくわかる史料である。それでも、八重がどのような願いをもって嬬堂へ参拝したのかがわからないのが残念である。

3. 芦峯寺姥尊の縁起と勧進活動

それでは次に、芦峯寺嬬堂の僧（芦峯寺衆徒）が、嬬堂でどのような縁起を講じていたのかを見ていきたい。そして、どのように芦峯寺嬬尊の由来や功德を読み聞かせていたのかを考えていきたいと思う。

芦峯寺では、芦峯寺衆徒の布教・勧進活動が活発になるとともに、立山への参詣者や檀那場の信徒たちに語る嬬尊の由緒と功德を記す縁起や勧進記が必要となり、1700年代の後半から作られるようになっていく。特に、「自他国宝物并法談願旧記」⁽³⁴⁾の寛政7年（1795）の書付には、

書付を以、奉願上候

當山御嬬堂、天明二年二月焼失仕候。其節御嬬者（見消す）焼失不仕候得共、脇立尊像并莊嚴等焼亡仕候二付、再建仕度奉存候得共、近年当山参詣見茂薄ク、其上一山困窮仕候故、未再建等不得仕恐入申候。依之御嬬尊并宝物等為結縁卯辰於乘龍寺認人為拜右寶錢を以少々宛再建之手掛仕度奉存候二付、當七月十五日より八月十五日まで日数三拾日之間式通之義奉願候。願之通、被為 仰付被下候様奉願上候。以上。

寛政七年卯四月 立山芦峯寺

衆徒中 印

社人中 印

寺社

御奉行所

とあり、天明2年（1782）2月に芦峯寺嬬堂が焼失し、嬬尊は焼失をまぬがれたが、脇立尊像と莊嚴などが焼亡してしまったことが記されている。そして、天明7年（1787）に加賀藩によって、嬬堂は再建されたが、天明期の火災により、嬬堂が焼失してしまい、脇立尊像を焼失、莊嚴も失ってしまったのであるから、

取り戻すための勧進が急務であったようである⁽³⁵⁾。そのためか、安永8年(1779)の年紀が記されている芦峯寺日光坊の『立山大縁起』3巻のうちの「葦辨媼堂大縁起」⁽³⁶⁾や文化14年(1817)の寺社奉行所へあげた控えである『立山縁起』⁽³⁷⁾権教坊本)などが作成され、媼尊は「一切諸仏衆生の母」とし、豊芦原辺りに、左手には五穀を納めて右手には麻の種を執持し、媼の形で現れたと記したのである。そして、

- ①慈興上人(立山を開山したと言われる人物)の母親が血の池地獄に堕ちて苦しんでいること。
- ②血の池地獄に堕ちるのは、女人には月に7日、年84日の月事(月経)があり不浄だからということ。
- ③慈興上人の母親が血の池地獄に堕ちる女人を助ける仏により、和銅7年(714)甲辰6月14日に、血盆経136巻の一部を定めて36部書写し、8万4千本卒塔婆を立て、「龍女成仏」を唱え、苦しみからのがれられたこと。
- ④閻魔法王により、慈興上人の母親を本尊として立山をすべての者の生死をつかさどる所とし、これによって立山の麓に女人成仏の霊場が出来たこと。
- ⑤元明天皇の勅願により和銅7年7月16日、芦峯に136端(反)の白布で橋を掛け、閻魔堂の橋向こうに媼堂を立て置いたこと。三途で迷う者は、財や法を施し、布橋を掛け渡し、清浄な心で修行したうえでこの霊場に参詣すれば、善行を成すことが出来るということ。

といった媼尊の由緒と功德を記し、さらには芦峯寺媼尊が「立山権現の親神」とするものもある⁽³⁸⁾。

また、媼尊と女人救済の法会である布橋灌頂会とが関わる勧進記を見ると、寛政7年(1795)に媼堂の別当を勤めた大仙坊が記した「立山御媼尊布橋布施主帳」⁽³⁹⁾にも媼尊の由緒と功德が記されている。まず「そもそも御媼三尊は立山大権現御親神なり」から始まり、「御宝前に天之浮橋有り、この橋と言うは渡るのは善人のみ、しかるところ四海男女成仏のため彼岸中日において白布百三十六反を掛け渡し、貴賤を別けずに救いたまう」とあり、「六十六体の尊像として現わし、諸国霊場が多いといえども、御媼靈現はこの処に宿る」といっているのである。

さらに、信州を主な檀那場としていた芦峯寺の宝伝坊が、天明期(1781~1789)に芦峯寺・媼尊の功德を説き、脇立として聖観音菩薩像と地藏菩薩像の仏像を建立するように勧めているが、この趣旨に賛同し寄進した新井権衛門へ、天明7年(1787)10月に次のように記された証印を差し出している⁽⁴⁰⁾。

證印曰

夫當山ト者諸佛瑞集之梵屈衆
生濟度之靈地麓ニハ御媼尊道場ハ
諸尊之浄土極楽莊嚴之大功德也
然所ニ御脇立建立之施主現世ニハ壽
命長遠子孫繁昌守護給來世
ニハ五道重罪ヲ滅則心成佛無疑者也
依テ如件

立山願主

天明七未歲十月日 寶傳坊
御脇立觀世音菩薩

寂照潭月信女
惠山了智居士
明心自白大姉
實源妙照信女
延室貞壽信女
實山良法信士

恭應勤春禪定尼

新井権右衛門殿

この証印には、芦峯寺嬬尊への施主にはその功德として、現世では「寿命長遠」「子孫繁昌守護」を、来世では「五道(の)重罪を滅して則心成仏に疑いなし」といつている。

以上のようにみても、芦峯寺の衆徒らは、縁起を作成し、「立山権現の親神」としてその由来や功德を語っており、その中で芦峯寺の嬬尊は嬬堂の本尊となり、立山をすべての者の生死をつかさどる所としたことによって「女人成仏の霊場」が出来たのだと言いつている。つまり、1700年代後半以降、芦峯寺の宿坊家にとって、嬬尊への信仰が勧進・布教活動の中心となつており、現世での「寿命長遠」「子孫繁昌守護」を言いつつも、来世、特に「女性の死後」の功德(=墮地獄からの救済)を大きな核としていつているのである。

そのような中で、宝伝坊の元良が文政3年(1820)6月15日に記した『御嬬尊縁起』⁽⁴⁾が興味深い。

この縁起の冒頭部分には、他の縁起類などと共通した由緒や功德が記されており、「一切衆生の母の姿で、この世では福德寿命をさづけ、衣食を与え、来世では極楽浄土へ導いてくれる」や「六十六躰の尊像は諸国霊場をあらわし、嬬尊の霊験を宿すといえども、立山の嬬尊が日本第一の福德寿命の神様である」、「嬬尊に参詣する者は、福德円満や五穀成就、一切の大願が成就し、一切の罪業(ざいごう)が滅する。御山安全のために三尊へ青銅三百文と青銅百文を供え、六十六躰には金百疋を供えなさい」といつたことが記されている。後半部分には、以下のように嬬尊に奪衣婆としての性格が見られる(下線は筆者による加筆、一部読みやすいよう文字を〔 〕内に変換していつている)。

是即人門母ノ躰内ニやどる時、御嬬尊ハ、我が祖母トナリて三尺のえなきぬ〔えな衣〕を着ス。人門娑婆ニ生シときならば、七まいにてほうじ奉候と申てかりて生るるなり。其のほうをん〔報恩〕をくらざるのみにあらず。ほしいままに罪ごうをつくり、又さんづのこときゆえかへり、目ニハ大墨闇を見て、初七日ニハ死出の山を越、二七日ニハさんづ川を越時、此川の廣さ深さ四千由旬なり。但シ壺由旬ハ百五十丁也。娑婆の道四里六丁也。百六拾六里廿四丁と成ル。此川に渡り瀬三つ有り。先川上のせをせんすい瀬〔先水瀬〕ト申なり。さいごう〔罪業〕あさき人此所渡ル。中のせを橋渡と名り、金銀七宝の橋なり。善人のみ渡ス。川下の渡りを深水瀬と名附たり。是を三途川と号ス。なみのたかき事、火山之如。かわのながれはやき事、弓をいるがごとく。其中にどくぢや〔毒蛇〕すむ。川のそこ〔底〕わたらんとするとき、どくぢや口をあけのまん〔開け飲まん〕とす。せにうかばん〔浮かばん〕とする時、鬼共弓矢ニていつている。如斯、うきなんきして、ようように向のきしに着ぬる。葬途川のうば〔姥〕のたけハはんゆしゆん〔半由旬〕あり。まなこハ七八寸もあり。かがみのごとくにして光りある事、日月のごとし。めを開とき日中のごとし。めを閉時ハくらやみのごとし。□ハみみ〔耳〕まできれ上り、罪人姥の前ニきたるとき、めもあけられずにをそろしく〔恐ろしく〕なり、其時姥しばらくかを〔顔〕になだめをつけて申ようハ、家そ母〔祖母〕となり三尺のえなきぬをかしをき〔貸しおき〕、娑婆へ生るる時なれば七まいにてかへし〔返し〕申とゆい、未だ白布壺尺もほうぜず〔奉ぜず〕。いまきたる者はぎとる。ざいにん、もうすようハ、金銀ハ娑婆ニ捨果て来ル。さだめて十王の前にてはだか〔裸〕にてはぢをかなくすべきよりうなし。唯御通シ可被成〔なられるべし〕候よう奉願上〔願い上げ奉り〕候ト申上ルなり。其時姥の申には、はやくぬけ、はいで〔剥いで〕めし火ニ焼くべしと申也。罪人なくなく〔泣く泣く〕かの衣をぬきて葬途川の姥ニ渡ス。罪人しやば〔娑婆〕にありし時は、七珍万宝を蔵二つみ、けんぞくをあまた〔数多〕かしづかせ、えしやう〔衣装〕を四季ニきかへしに、迷途道中うの旅のならとて一衣だにも身二つかず、なけじこそかなしけれ。

十王経ニ曰、二七日ハ亡人ない川をこすト云云。

爰ニ於天竺ニぎおんしやう者あいく、大王ト申帝王あり。此姫、御入滅之時、則チ三途川ニいたり、其

ときニ、三途川の姥申には、なんぢ生れ初むるとき、我が祖母トなりて、三尺のえなぎぬを着す。未だ白布壹尺もほうぜず。なんぢ[汝]着たる物はぎとる[剥ぎとる]トいかり[怒り]給ふ。其時にひめ申さるニハ、われハ大王のひめなり。ゆるしてと申。姥いかりて申には、迷途道には王なしと申なり。ひめ此苦じゆずをのかれがたく、夫ハ娑婆へよみがへり[蘇り]の願を立被成、御願かのうて、天竺へよみがへり被成て、胞衣の報恩に天台山於石橋、百三十六端の白布掛渡、玉のはた・ほこらたてならべ立並、極楽浄土のしやうごん[莊嚴]かざりたて、とそつ天[兜率天]へのほらせたまうナリ。

御宝前ニ河有。葬途川ト号す。此川に橋有。あまのうきはしと申すなり。

一切の諸仏菩薩にひやう[表]してあり。橋の長サ廿五間二十五菩薩ひやうす。板の数ハ百八枚、百八ぼんのうの珠数かづとひやうす。高さ十三間十三仏ニひやうす。ぎぼう珠ハ六つ有。南無阿弥陀仏の六字ニひやうす。はば二間、中九尺取て九品の浄土、釘かすかへ[鏝]ハ六万九千三百八十四、鏝、是法華経の文字にひやうす。自善人[善人より]外ほかに不渡ず。二ツには愚智の衆生をわたさんがため、石橋と名附、毎年秋彼岸中日に此橋に百三十六端白布を掛渡し、極楽浄土のしやうごん[莊嚴]して、西方浄土へ往生する事無疑者[うたがいなきもの]也。

この縁起には、人が母の胎内に宿るときに、嫗尊が「祖母」となって「三尺のえな衣」を着せてくれるとあり、この世に生まれるときに嫗尊に「7枚にして返します」と言って借りて生れているという。そうすると、ここで芦峯寺の嫗尊と安産信仰が生まれてもおかしくはない。しかし、この続きには「奪衣婆」の話が語られ、この世に生まれるときに7枚にして返すというが、いまだに白布一尺も受け取っていないので今着ているものを剥ぎ取ると言っているのである。さらに、三途川で奪衣婆に出会った姫は、この苦から逃れるために、天竺に蘇って、胞衣(えな)の報恩に天台山に石橋をおいて、「百三十六端の白布」を掛け渡し、玉の旗・鏝を立て並べ、極楽浄土の莊嚴を飾り立て兜率天へのぼられたというのである。また、御宝前の川を葬途川といい、この川にかかる橋を「あまのうきはし」というと言っている。つまり、「あまのうきはし」(天の浮き橋=布橋)に136端の白布を掛け渡すのは、生まれるときに嫗尊から借りた衣(白布)を返し、三途川で奪衣婆から衣を剥ぎ取られるという苦しみから逃れるためであるといい、布橋灌頂会において「白布を寄進する」いわれを語っているのである。

そうすると、芦峯寺の嫗尊は祖母として生まれてくるときに3尺のえな衣を着せてくれる存在であり、生前に嫗尊へ約束の衣(白布)を返しておけば「奪衣婆」から与えられる苦から逃してくれる存在であるというのである。やはり、この縁起でも「女性の死後」の功德を強調しているのである。

そしてまた、『天保十三年度 諸堂勤方等年中行事外数件』⁽⁴²⁾に、

御嫗堂

一御縁日	年内	六十度
一節句	同	五度
一祭礼	同	四十度
一法用	同	三度

とあり、嫗堂での行事は多くあるが、『當山古法通諸事勤方旧記』⁽⁴³⁾に、

本尊并治国両尊御衣召替之式

- 一 香花・燈明、御縁日通
- 一 翌年極月廿四日ハ二月九日迄、六十一歳以上ニ而信心之老女七人、毎日三度宛垢離ヲとらせ、清き衣服整、清浄之室ニ為入置、正月八日ニ苧いづき初メ仕、祝ひ与して餅吸物神酒振舞可致候事。尤同日ハ於清堂圓(ママ)き烈座為致、中央ニ香盤を置、無怠慢香を焚、苧うみはた織る事。二月五日迄ニ出来上ル。九日衆徒、社人沐浴いたし出勤仕、堂内ニ幕ヲ張廻シ、本尊三躰之内中之本尊御召替ハ一老、左之本尊別当行者、右之本尊前行者、治国両尊ハ前行者、別当行者兩人ニ而御召替可致事。

一 読経作法 御縁日通

一 御衣御下ハ数代靈験有之二付、群参ノ輩江乞随少々ツゝ授之。

と記されているように（下線は筆者による加筆）、媼堂の祭事は芦峯寺一山（芦峯寺衆徒らの組織）の別当を中心に執り行われており、芦峯寺の媼尊は「女性によって祭祀される姥尊」ではなかったのである。

おわりに

江戸時代の芦峯寺においては、この媼尊や媼堂が大きな存在であったことがわかっている。しかし、芦峯寺媼堂で祀られていた媼尊は、様々な信仰の影響を受け、そして明治期の神仏判然令をはじめとする一連の神仏分離の動きで媼堂が破却されていることもあり、わからないことも多いのである。

そこで、全国的で祀られている「姥尊」をみると、その信仰として安産や子育てを祈るところが多く、しかも、芦峯寺媼堂から勧請されたという福井県福井市の能念山仏心院乗久寺（時宗）の「跽倉媼婆尊像」では、日本六十余州に分身して、貧窮短命の者には福寿を授け、多病の者には方便をもって妙薬を与えて病苦を除き、また女人難産にて苦しい時は婆子（跽倉媼婆尊）の覆っている綿巾を産婦の腰にまとうと、たちまち平産するということである。また、同様に芦峯寺媼堂から勧請されたという長野県大町市の大姥堂の大姥尊像も、「山の神」としての役割が見られるものの、地元の人々には五穀豊穡や山仕事の安全祈願のほか、子供の癩の虫封じとして虫切り鎌が授与されるということである。

それに対して、芦峯寺の媼尊では、安産や子育てを願って女性たちが参拝するという史料は見当たらないのである。

そこで、立山を訪れた人々の紀行文や参詣記、随筆集などをみると、芦峯寺の媼尊像は「立山を開山した慈興上人の母親が亡くなり、これを悲しんだ上人が自ら刻んだ像」として広く知られていたようである。

女人禁制の霊山という関係で言うなれば、高野山では弘法大師の御母公が女人禁制のため、弘法大師の元へ行くことができなかつたことで麓の九度山にある慈尊院で暮らしていたが、弘法大師が母の霊を祀ったことにより「女人高野」とも呼ばれ、現在でも安産や子育てを願う女性の参拝者が多い場所である。同様に、女人禁制である大峰山でも、洞川に役行者の母親が祀られる母公堂があり、子授けや安産のお守りが売られているという⁽⁴⁴⁾。

しかし、芦峯寺の媼尊への参詣の目的は、立山登拝へ向かう際であることから、男性たちによる立山山中での安全を祈念するためであることがわかり、立山登拝者にとっては「山の神」としての信仰が窺えるのである。

それでも、「山の神」を「産神」とするところは、特に東北地方に多く、例えば陸中紫波郡（現：岩手県）で「山の神、シヤモジ神、箒神が集まらぬうちは子は生れぬと云つて居る」⁽⁴⁵⁾、また宮城県牡鹿郡女川町江島でも「産神として山の神を祭る。若い女はほとんど月の十二日に山の神にまいる。出産が近づき腹が痛みだすと、家の中に山の神の掛け軸（これはふだんはトウガシラの家であずかっている）をかけ、家族のもの（母とか姉妹）が山の神の祠にまいって、そこに供えてある小石を一つ借りてきて、山の神の掛け軸の前に供える。無事に産がすむと石を二つにしてお礼まいりをする。難産の時には夜半におまいりする。」⁽⁴⁶⁾などという。

確かに、大藤ゆき氏が『児やらい』⁽⁴⁷⁾の中で、「山の神はわが国の民間信仰の中で、もっとも顕著なものの一つであって、その内容はかなり複雑化している。たとえば狩猟を生業としている人びとの信じる山の神と、農民の山の神信仰とは区別して考えねばならぬようである」と述べ、さらに「これらの山の神は血忌をとくに嫌うといわれているのに、これが産神として産室にのぞむというのは矛盾するようである。ただ山の神には女神があつて、その女神がお産をするという信仰がともなっている」というのだから、芦峯寺の媼尊は女性の血忌を嫌う神と考えられたのかもしれない。それは、媼尊の祭事を芦峯寺一山の別当を中心に執り

行われており、「女性によって祭祀される姥尊」ではなかったことから窺える。また、『當山古法通諸事勤方旧記』⁽⁴⁸⁾に、

○一、前年十二月廿四日暁天方前行と申、朝夕二度之行水仕、又御縁日前日二日中参勤之時ハ別而壹度行水仕候。尤、円座之上ニ座し御供所方外ニ而ハ自由ニ寝る事相成間敷事。常ニ浄衣着し足袋ヲ召シ、隣家ニ而も私用ニ罷出ル事無用。但シ媼堂参勤之砌ハ格別清浄衣を着し可申候。附リ。朝寅ノ時ニ起キ、卯之上刻ニ媼堂へ参勤仕り、右心得方第一 今上皇帝・加賀大守御武運長久・万穀成熟・御家中迄御繁栄之処、次ニ当山静謐・佛法興隆、第一火之用心其外諸病退散之処、可抽丹誠条、大切ニ相心得可申候事。とあり、媼堂で「武運長久」「万穀成熟」「御家中迄御繁栄」などの祈祷が執り行われていたことがわかるのである。

そして、芦峯寺衆徒たちによって作成された縁起によって、立山をすべての者の生死をつかさどる所とされ、媼尊を「立山権現の親神」とし、媼堂に「女人成仏の霊場」が出来たのだと語ったのである。つまり、1700年代後半以降、芦峯寺の衆徒たちは、女性の信者だけでなく、平安後期ごろから語られていた「立山地獄で苦しむ女性」を救済するという、男性の信者をも得られる「女性の墮地獄からの救済」を選択し、勧進・布教活動を行ったと考えられる。

このことは、「一山旧記扣」⁽⁴⁹⁾に、

一同（※慶長）拾九年、芳春院様玉泉院様御両方様、中宮媼堂江為御参詣、芦峯江御着御逗留被為成、媼堂寶前之幡・天蓋・腰付・御召衣色ニ被仰付、其上、御宝前之橋ニ布橋を御掛、大分之儀式被為成、社僧・神主中迄江拝領被下、御下向被為成候。

とあり、慶長19年（1614）に芳春院（加賀藩初代藩主・前田利家の夫人）と玉泉院（加賀藩2代藩主・前田利長の夫人）が媼堂へ参詣しており、記されている「大分之儀式」を女人救済の儀式である布橋灌頂会の初見とされていることから窺える⁽⁵⁰⁾。この史料からはなぜ芳春院と玉泉院が媼堂を参詣したのかはわからないのにも関わらず死後の救済を求めた儀式であるといい、また後世に書き写されたものであって同時代の記録がないにも関わらず、この話をもって芦峯寺衆徒たちが布橋灌頂会への勧進活動を行っているのである⁽⁵¹⁾。

そして、芦峯寺の媼尊への信仰が現在でも「布橋灌頂会との関わりでの女人救済」とされたままであるのは、やはり明治期の媼堂の破却が大きいのであろう。芦峯寺の媼尊を勧請したと伝える福井市の乗久寺の躰倉媼婆尊像や大町市の大姥堂の大姥尊像への安産・子育ての信仰は各地で生まれた信仰であり、芦峯寺でも芦峯寺衆徒から女性たちが祀る尊像となれば、また違った信仰が生まれたと考えられるからである。芦峯寺の媼尊は、媼堂破却以降、多くが散逸したと伝えられ、本尊とされた3躰は媼堂再興を願う芦峯寺一山会の尊像として開山堂へと移された。そして、その後再興の願いは聞き届けられず、昭和15年に村方へ寄附され、終戦後に閻魔堂へと移されている⁽⁵²⁾。

それにしても、芦峯寺の女性たちにとって媼尊はどのような存在であったのか、やはり疑問が残る⁽⁵³⁾。山へ狩猟に行く男性たちの安否を祈りはしなかったのであろうか。それとも立山を開山した「慈興上人の母親の像」とするならば、最初から芦峯寺衆徒たちの祀る尊像であったのであったのであろうか。今後も調査を行い、芦峯寺の女性たちの媼尊への信仰についてもさらに考えていきたいと思う。

【付記】

本稿作成にあたり、福井市乗久寺の木下賢良御住職より写真掲載の許可をいただきました。また富山県[立山博物館]主任・学芸員の加藤基樹氏より助言をいただきました。

ここに記して御礼申し上げます。

【註】

- (1) 現存している媼尊すべて芦峯寺閻魔堂蔵。そのうち、5軀は富山県指定文化財。
- (2) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。
- (3) 芦峯寺の媼尊については、平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成29年7月刊）を参照。
- (4) 廣瀬誠「立山御姥信仰の一考察」（『信濃』第16巻第1号 [通巻第169号] 所収、信濃史学会、1964年1月刊所収）、29～43頁。この論文は、他に高瀬重雄編『白山・立山と北陸修験道』（山岳宗教史研究叢書10、名著出版、1977年9月刊、226～234頁）や廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、1984年10月刊、34～46頁）に「立山の御姥信仰」として掲載している。
- (5) また、廣瀬誠氏は『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、1984年10月刊、60頁）の「立山衆徒の絵解きをめぐって」の中で、「仏教思想の影響も受け、他の信仰とも融合して、変容し、生長し、その過程において、あるいは記紀の伊耶那美神話を生み、あるいは土臭い芦峯の姥尊信仰ともなったのであろう。万物の母神といふことから、あるいは立山権現の親神とも説かれ、あるいはまた立山開祖の生母の像で、布橋灌頂はその葬礼の法式を伝えるものとも説かれた。」とも述べている。
- (6) 石原与作「立山中宮寺姥神の性格（1）」（『越中史壇』第29号所収、越中史壇会、1964年7月刊、34～40頁）、「立山中宮寺姥神の性格（2）」（『越中史壇』第31号所収、越中史壇会、1965年5月刊、19～27頁）。
- (7) 芦峯寺の媼尊研究については、他にも、木倉豊信「立山古文書について」（木倉豊信編『越中立山古文書』所収、立山開発鉄道株式会社、1962年12月刊）や米沢康「立山媼尊信仰の源流」（『藝林』第16巻第4号所収、藝琳会、1965年8月刊）、川口久雄「立山曼陀羅と姥神信仰—敦煌本十王経画卷の投影」（『日本海域研究所報告』第5号所収、金沢大学日本海域研究所、1973年3月刊）、菊池武『我が国の擬死再生儀礼と立山布橋大灌頂会』（富山県立山博物館調査研究報告書、富山県 [立山博物館]、前篇 [1994年3月刊]・後篇 [1995年3月刊]）、米原寛「芦峯寺うば尊の性格とうば尊像造立の背景—山姥の伝承から—」（『研究紀要』第8号所収、富山県 [立山博物館]、2001年3月刊）、福江充「芦峯寺の媼尊（オンバサマ）とお召し替え行事」（『研究紀要』第12号所収、富山県 [立山博物館]、2005年3月刊）などがある。また、芦峯寺媼尊信仰については、『立山町史』上巻（立山町、昭和52年10月刊）などでも紹介されている。
さらに、全国の姥神信仰については、松崎憲三『地蔵と閻魔・奪衣婆—現世・来世を見守る仏—』（慶友社、2012年9月刊）や鹿間廣治『奪衣婆—山形のうば神』（東北出版企画、平成25年3月刊）、田中英雄『東国里山の石神・石仏系譜』（青娥書房、2014年8月刊）、石田明夫『歴春ブックレット おんば様』（歴史春秋出版株式会社、1999年10月刊）などでも紹介されている。
- (8) 竹中邦香「越中遊覧志」巻8（『越中遊覧志』所収、言叢社、昭和58年6月刊、297頁）。
- (9) とともに、石田明夫『歴春ブックレット おんば様』（歴史春秋出版株式会社、1999年10月刊）、30頁や46頁など。
- (10) 鹿間廣治『奪衣婆—山形のうば神』（東北出版企画、平成25年3月刊）、28～29頁。
- (11) 「立山曼茶羅の里史跡を訪ねる」（福江充監修・佐伯喜代男編集、立山風土記の丘（立山町教育委員会）・立山曼茶羅を偲ぶ集い、非売品）、47頁。
- (12) 能念山仏心院乗久寺蔵。年紀は記されていないが、江戸時代（後期ごろか）のものと思われる巻子の縁起である。
- (13) 能念山仏心院乗久寺蔵。
- (14) 躰倉媼婆尊像は秘仏で、その御姿を拝むことができるのは不定期に開催される御開帳時のみである。嬰兒を背負った像形をとり、躰倉媼婆尊の左肩から嬰兒が顔を覗かせている。現在でも、おっばい型のお守りがいくつも奉納されている。また、供米をいただきにくる女性の参拝者もいるとのことであった。詳細は、平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成29年7月刊）を参照。
- (15) 西正院大姥堂蔵。大姥尊像も西正院大姥堂蔵で、大町市指定文化財。御開帳は7年ごとに行われる。
- (16) 長野県大町市の大姥堂伝承と芦峯寺媼尊の関係については、細木ひとみ「立山芦峯寺の媼尊と西正院大姥堂（長野県大町市）の大姥尊伝承」（富山県 [立山博物館]『研究紀要』第24号所収、2018年3月刊）や平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成29年7月刊）を参照。
- (17) 子供の癩（疔）の虫と虫切り鎌については、長野県では特に虫倉山（長野県長野市）近辺の大姥様の伝説にゆかりのあるところで授与されている。虫倉山の山姥編集委員会編『虫倉山の山姥—大姥様の伝説—』（中条村教育委員会、平成19年3月刊）や松崎憲三「長野県北部の大姥様信仰—虫倉山周辺と大町市域を中心に—」（『信濃』第六九号第一号・通巻第八〇四号所収、信濃史学会、平成29年1月刊）などを参照。

- (18) 廣瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』（桂書房、1984年10月刊、45頁）。註（2）を参照。
- (19) 平成29年度前期特別企画展では、芦峯寺媯尊との関わりを伝える姥尊として、乗久寺の躰倉媯婆尊像と大姥堂の大姥尊像とともに、新潟県十日町市新座の両澤山大慶院の本尊・姥婆尊像を紹介した。この姥婆尊像においては、寺の言い伝えによると、承德元年（1097）に寺の檀当であった石原道仙の見た夢に現れた恐ろしい老婆（奪衣婆）の語った話によって、立山芦峯寺を訪れ、姥尊を授かり遷座したというのである。奪衣婆との関わりを示す由来を持っている姥婆尊像ではあるが、地元では女人成仏の神様、セキの神様、子供の守り神として広く信仰されているという。
- (20) 『和漢三才図会』[下]（株式会社東京美術、昭和45年3月刊）。
- (21) 佐藤月窓「立山紀行」（『肯構泉達録』巻之十三所収）。
- (22) 『孟蘭盆経』などによると、目連は神通力を使って、亡くなった母親が天上界に生まれ変わっているかを確認したところ、地獄に墮ち、逆さ吊りの責め苦にあっていた。目連は釈迦に相談すると、亡者救済の秘法を伝授され、目連は教えに従って法を施すと、たちまちのうちに母親は地獄から浮かび上がり、歓喜の舞を踊りながら昇天したというのである。
- (23) 津村涼庵「譚海」（『日本庶民生活史料集成』8所収、三一書房、昭和44年刊）。
- (24) ただし、姥像についての記載の前に「其邊の谷にそひて、二三十間ほどづつの池水あり、二つは血色、一つは常の水なり。血の池に手をひたせば赤く肌へ染て容易に脱せず。池水熱湯にしてよほどあつく、こらへがたきほどの事たり。池より少し上にさうづ川という所あり、川はなくて小石をあつめて、塔のかたちにつみたる所多し。」とあり、血の池地獄の傍に祀られている像とも考えられるので、検討が必要である。
- (25) 十返舎一九「金草鞋」第十八編（『十返舎一九・越後紀行集<第2巻>越中立山参詣紀行』所収、株式会社郷土出版社、一九九六年三月刊）。
- (26) 国立国会図書館蔵。尾張藩士某が、立山・富士山・白山を巡り、記した道中記である。
- (27) 昇龍山観音庵蔵。
- (28) 原本は未見。
- (29) この史料については、細木ひとみ「立山芦峯寺の媯尊と西正院大姥堂（長野県大町市）の大姥尊伝承」（富山県[立山博物館]『研究紀要』第24号所収、2018年3月刊）でも紹介している。
- (30) 個人蔵、立山町郷土資料館寄託。
- (31) 現存している媯尊のうち、本尊とされる3軀は像高46.5cm、48.5cm、56.0cmである。
- (32) 『老の路種』巻二、金沢市図書館蔵。
- (33) 「善光寺・立山参詣旅日記」（『岐阜県史』史料編近世七所収、岐阜県、1971年刊）、545頁。
- (34) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵・加越能文庫。
- (35) 福江充「越中立山芦峯寺の由緒書・縁起・勸進記と木版立山登山案内図・立山曼荼羅」（富山県[立山博物館]『研究紀要』第19号所収、2012年3月刊）を参照。
- (36) 個人蔵。
- (37) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。冊子中に、「芦峯中宮寺媯堂大縁起」として由来や功德が記されている。
- (38) 他に、成立年代は不明ながら旧芦峯寺善道坊の『立山大縁起』3巻（当館蔵）のうちの1巻に「葦峯中宮寺媯堂大縁起」などがある。
- (39) 大仙坊蔵。
- (40) 個人蔵、大町市立大町山岳博物館寄託。
- (41) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。
- (42) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。高瀬保編『越中立山古記録』第4巻所収（立山開発鉄道株式会社、平成4年6月刊）。
- (43) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。廣瀬誠編『越中立山古記録』第1巻所収（立山開発鉄道株式会社、平成元年9月刊）。表紙には「文政十二丑年五月改之」とあるが、「天保十三年改而記之」や「安政五年八月五日評定之上二而相定」などと記されており、書き足されていることが窺える。
- (44) 宮家準『大峰修験道の研究』（株式会社佼成出版社、昭和63年1月刊）、400頁。「里の女性は、こうした山の神の力を得て山を下った山伏を母子堂などの境界の場所で迎え、それと交わることによって豊饒の力を体得しようとした。（中略）彼女らにとっては、山に入って魑魅魍魎にとりつかれ、その精霊を宿す危険をおかすより、山に入って修行して山の神の力を体得した山伏に接して山の神そのものの豊饒力を得る方が望ましいことだったのかも知れない。山を下る山伏の一夜妻になる女性もいたのである。」という。さらに、同書（396～397頁）には、「鎌倉時代初期に成る『諸山縁起』所収の大峰山に関する先達の口伝によると、役行者の母は大峰山中の神仙から一日ばかりの処にある五銚の形に似

た宝塔ヶ岳の石屋に住んでいた。そして行者は日夜三時に神仙からここに赴いて、石屋の前の礼石のところで母を拝礼した。さらに行者は、この母のために大唐第三の仙人北斗大師を招いて大日ヶ岳で千塔塔婆供養をしたとされている。(中略) これらの伝承では役行者の母は大峰山中にいて、日夜行者の拝礼を受け、最後は行者と共に入唐しているのである。」と述べ、「中世末期以降になると、役行者は洞川の母公堂のところで母と別れて入山したとか、行者の母が吉野から行者をたずねて、安禅の蔵王堂さきの伏拝みや、かつての女人結界を越えて中小場まで来たが、そこから先には進めず、足摺りをして残念がったとの伝承が作られている。また役行者が山中で修行していて捕まらないので、里にいる彼の母を捕えておびき寄せたとの話も古くから知られている。そして、行者が母のことを案じる気持ちに切なるものがあるのは、母の白専女は出雲から大角を入婿して行者を生むが、その後夫を離縁し、以後母子のみで生活した。それ故行者と母とは非常に強い絆で結ばれていたのだとの話がつけ加えられていくのである。」と、役行者と母との関係を紹介している。

- (45) 『産育習俗語彙』(国書刊行会、昭和50年10月刊)、38頁。
- (46) 大藤ゆき『児やらい』(岩崎美術社、1968年4月刊)、69頁。
- (47) 大藤ゆき『児やらい』(岩崎美術社、1968年4月刊)、70頁。
- (48) 註(43)に同じ。
- (49) 芦峯寺一山会蔵、富山県指定文化財。
- (50) 「寺社来歴」(『加賀藩史料』第二編所収、清文堂出版、1930年2月刊)の慶長19年8月の条にも同様の記述がある。
- (51) 布橋灌頂会についての研究も多い。詳しくは、加藤基樹「「布橋灌頂会」研究の方法—関係史料にみる観念的・実態的—」(富山県 [立山博物館] 『研究紀要』第23号、富山県 [立山博物館]、2017年3月)を参照。
- (52) 平成30年度後期特別企画展「立山の明治維新—継承、そして創造—」展示解説書(富山県 [立山博物館]、平成30年9月刊)の細木ひとみ「明治期の嬬堂破却と嬬尊への信仰」を参照。
- (53) 『當山古法通諸事勤方旧記』より、福江充氏は「江戸時代後期になっても一山の年中行事のなかに山の神を迎える「げいの山」(芦峯寺雄山神社の境内地に仮装の立山を造り、そこに立山大権現を一定期間招き迎えた)の儀式や、嬬尊の山の神としての性格を示す「おもきもき」(木枝で模造した男性性器)の奉納、及びそれを使っての嫁祝いの風習(嫁入りした女性が子宝に恵まれるように、他者が「おもきもき」を使ってその女性の尻を叩く)、嬬尊に小袖や布・帯を奉納する風習(女性の山の神である嬬尊の歓心をもとめるために奉納した)などが見られたりするように、土着の山民や焼畑農民に端を発する山の神に対する信仰が相当存在感を示しており、教義に基づく仏教信仰とうまく共存していた」(平成21年度特別企画展「立山の地母神 おんばさま」展示解説書、富山県 [立山博物館]、平成21年9月刊)と記すが、史料からどう読み取るかは検討の余地がある。